米国医学図書館協会 Fellowship による 研修を受けて—報告—

本 田 品 子*

経 緯

医学図書館員に対する fellowship を何年か前から探していた所、米国の医学図書館協会 (MLA) が米国・カナダ以外の外国人に対して、医学図書館研修 fellowship grant の応募者をつのっていることを、たまたま知った。それは 1971 年 12 月発行の「JMLA 会報」第 12 号であった。早速、募集要綱を入手したが、その内容は、次のようなものであった。

名称: Medical Library Association 1972~73 年 Fellowship Grant (国際協力委員会主管)

内容: MLA は 1972 年 9 月から 1973 年 6 月までの間に、米国の 1 つまたはそれ以上の医学図書館の見学と実習および医学図書館学コース取得を含むか 6 月間の fellowship を提供する。(1 名)

条件: 同協会は、①在米期間中 1 か月 500 ドルの生活費、②授業料および、③米国内の承認された旅行の旅費を支給する。

自国から米国への往復の旅費は、何らかの形で受給者 (fellow) が負担する。

資格: 1) 応募者は、4 年制大学卒の学位および図書館学の学位を持っていること。(日本の場合、文部省の司書資格でもよいようである。)

2) 応募者は、医学図書館在職または就職予定者であること。

3) 帰国後医学図書館でのポストを保証する所属長署名入りのポスト保証書を提出すること。

4) 応募者は、本 fellowship 受給に際し、帰

国後 2 年間は、自国の医学図書館で勤務しなければならない。

5) 応募者は、TOEFL 試験をパスし英語にたんのうであることを示すこと。これは、米国内の殆んどの大学院入学に必須なものとされている。

6) 応募者の資質に通じた責任のある人からの推薦状 3 通。

以上の資格・条件に適合すると考える場合は、応募申込書と次の書類を添えて送付されたい。

- (1) 大学成績証明書および図書館学成績証明書
- (2) 推薦状 3 通
- (3) TOEFL 試験の結果
- (4) 健康診断書
- (5) 帰国後のポスト保証書

送付先:

Dr. Carroll F. Reynolds, Chairman
MLA Committee on International Cooperation
Falk Library of the Health Professions
University of Pittsburgh
Pittsburgh, Pennsylvania 15213
U. S. A.

TOEFL というのは、“Test of English as a Foreign Language” の略字で、米国の殆んどの大学の学部と大学院に英語を母国語としない国の人が留学する際、その受験が義務づけられており、各大学規定の各々の基準以上の点数を取っていなければ、入学が認められないというものである。連絡先は次のとおりである。

TOEFL
Box 899, Princeton

* Shinako HONDA, 国立がんセンター図書館

New Jersey 08540

U. S. A.

ここに申込み受験料を支払えば、日本で受験できる。

以上の所定の手続を終了し必要書類を送付し、私の場合、1972年5月30日に MLA fellowship の受給者に決定したという通知を受け取り、同年8月31日離日したわけである。9月からの6か月、翌年の1月からの6か月かのいずれか選択できたが、私の希望で9月からの6か月にしてもらった。

この fellowship は、資金の関係で永い間中断していたが、医学分類法で有名な Eileen R. Cunningham さんが MLA に遺された基金をもとに、私が応募した前年度から再開され、再開第1回はインドの男性ライブラリアンが選ばれ、私が第2回目の fellow であったようである。

日 程

レイノルズ委員長との相談の結果、私の希望も入れて6か月の日程を、次のようにきめた。

- ・1972年9月5日～12月22日（1学期間）：ミシガン大学（ミシガン州アンナーバー）にて週4日間医学センター図書館をベースに実習と見学。週1回同大学大学院の医学図書館学コースをとる。この間、ミシガン州内の医学・生物学・その他関連図書館の見学。
- ・1973年1月4日～1月31日：南カリフォルニア大学医学部ノリス医学図書館（カリフォルニア州ロサンゼルス市）にて実習と見学。
- ・1973年2月1日～2月8日：カリフォルニア大学ロサンゼルス（UCLA）医学図書館にて見学。
- ・1972年2月11日～12日：ピッツバーグ大学（ペンシルバニア州）フォーク医学図書館見学。
- ・同2月14日：NLM と NIH 図書館見学。
- ・同2月19日～21日（ニューヨーク市）：コロンビア大学医学図書館、ニューヨーク大学医学図書館、コーネル大学医学図書館、マウント・サイナイ医科大学図書館、ブルックリン医学研究図書館（ニューヨーク州ダウンステート医学センター図書館）、ニューヨーク・アカデミー・オブ・メディシン図書館、ニューヨーク医学図書館センター、メモリアル・スローン・ケタリングがんセンター図書室見学。
- ・同2月26日：イエール大学（コネティカット州ニューヘブレン）医学図書館見学。
- ・同2月27日：マサチューセッツ総合病院図書室見学

米国医学図書館協会 Fellowship による研修を受けて（本田）

（ボストン市）。

- ・同2月28日：フランス・カウン ト ウエイ医学図書館（マサチューセッツ州ボストン市）見学。

見聞記・印象記

図書館ルーティン・ワークの処理の仕方は、どこでも大体似たりよったりである。例えば、私の見た範囲では、カレント・ジャーナルの受入れは、一・二の例外を除いてカードックス方式であり、貸出方法も大体同じようなものであった。目録業務は極力簡易化されており、オリジナル・カタログをおこなっている所は殆んどなく、原則的には NLM カレント・カタログとそのプルーフ・シートや LC カatalog とそのプルーフ・シート等によりサーチし、印刷カードを注文するかまたはそれをそっくり写し、ゼロックスで必要部数複製するか、またはオフセットで印刷している。多くの図書館で最も力を入れているのはレファレンス部門で、利用者のリーディングガイドや各種の質問に答えるレファレンス・デスクは必ずといっていい位図書館入口の最もいい場所にもうけられており、専門司書が交替でデスクを受け持っている。レファレンス・サービスの主流はメドラインによる文献検索で、これは、NLM を中心に米国全土に張りめぐらされたネットワークを通じて文献を即時に知らせるコンピューター・システムである。メドラインとは MedLARS on Line の略称で、現在では経費その他の理由で従来のメドラーズに代って Medline が活躍している。このへんの事情やメドラインの実際については、「医学図書館」19巻1号69～82頁（1972）に掲載されている野添篤毅氏の「AIM-TWX, MEDLINE—米国における MEDLARS の最近の動向—」に詳しく紹介されているので、参照いただきたい。

文献複写および現物を中心にした相互貸借は、非常に活発でこれに使用する相互貸借申込書のフォームは、国内で統一された ALA のものをどの分野においても全国的に使用しており、ノーカーボンの三連複写用レター形式で、これは米国図書館協会（ALA）から各々の機関が購入しているようである。また、ラベルを書き貼付するラベリング・システムは、私の訪問した医学図書館・病院図書室では例外なくゲイロード社の“SE-LIN labeling system”を使用していた。これは普通のスタンダードの欧文タイプライターのプラテンに取り付けた特殊テープに請求記号をそのタイプライターによりタイプ打ちすると同時に、ラベルの表面が透明テープにより自動

的に被膜処理され、この被膜処理されたテープを適当な大きさにカットし、ラベルを貼付する場所に裏紙をめくってのせ、専用の電気アイロンにて加熱処理すると、びったり貼付されるもので、ラベルが汚れたり剥れたりしないようになっている。タイプライターの活字はジャイアントに取りかえてもよいが、大部分の所ではそのままパイカを使用していた。いずれにしてもこのシステムは秀れており、日本でもこれを取り扱う業者ができ少しずつ流布し始めたようで、当館でも早速取り入れるつもりである。

シーリン・ラベリング・システム

1週間5日のうち4日間はミシガン大学医学センター図書館で実習・研修し、残りの1日は午前中授業のための自習にあて、午後はクラスに出た。授業は、G. Cruzat 先生の“Medical bibliography”という1回3時間で1学期2単位のもので、学生は20人位のこじんまりしたクラスであった。Cruzat 先生は、永い間デトロイト市のウェイン州立大学シフマン医学図書館で専門司書として働いていた方で、実務に詳しい先生である。授業の都度各分野の Reference tools やテキスト・ブック類のリストがプリントにして渡され、概略の説明があったのち、次回迄にこれとこれに目を通して、どういう内容のものか調べて来るようにおせつかるわけである。このようにして嫌応なくそれらの tools やテキストを手にするようになるわけだが、次の授業の時これらに関してコメントや説明等を求められるので、絶対手が抜けない。学生は実によく質問し自分が納得いくまでくだっていくのであるが、彼等の質問の英語がよく聞きとれないのには困ってしまった。クラスではいつも一番前の席に陣取り、3時間の間全身を耳にして、先生の話聞いていた。この“Medical Bibliography Course”で使った資料の内容および編成は、次のとおりである。参考のため列記する。

医学図書館 20 巻 1 号 (73)

概 略

- A. 医学書誌学入門
- B. 医学用語入門
医学用語の起源、接頭語・接尾語・語幹、および MeSH の解説
- C. 基本的参考書誌
 - a. 辞書、用語集、命名法、略語集
 - b. 索引誌および抄録誌
 - c. 特定索引誌および抄録誌
 - d. 各種名簿・名鑑および人名録(伝記)
 - e. ハンドブックおよびガイド類
 - f. データブック、各種表、統計ハンドブック
 - g. 視聴覚ガイド
- D. 特定主題
 - 1. 基礎科学
 - a. 解剖学
 - b. 生理学
 - c. 生化学
 - d. 薬理学
 - e. 微生物学
 - 2. 医学専門分野
 - a. 麻酔学
 - b. 皮膚科学
 - c. 家庭医学
 - d. 内科学
 - 1) アレルギー学および免疫学
 - 2) 心臓病学
 - 3) 肺疾患
 - e. 核医学
 - f. 眼科学
 - g. 耳鼻咽喉科学
 - h. 病理学
 - i. 小児科学
 - j. 物療内科およびリハビリテーション
 - k. 予防医学
 - 1. 精神・神経学
 - m. 放射線科学
 - n. 外科学
 - 1) 結腸・直腸外科学
 - 2) 脳外科学
 - 3) 整形外科
 - 4) 形成外科学
 - 5) 胸部外科学
 - o. 泌尿器科学

3. 医学史
4. 歯科学
5. 看護学
6. 獣医学

滞米期間の関係で1973年のMLA総会に出席できないので、インディアナ州ラファイエットにあるパーデュー大学で開催された中西部のMLA秋季Regional Medical Library Meetingに参加した。この地区会では、ビジネス・ミーティングは早朝とか夜とかに開かれ関係委員のみが出席し事務的なことを処理していたようで、主流はあくまでも研究発表やパネルディスカッションという学術的な催であり、参加者も熱心で実によく質問を討議していた。若い図書館員も盛んに発表し発言していたが、落着いて堂々とした態度には感心した。また、大小の病院図書室からも多数参加していたが、大学とか病院とかという格差は全然感じられず、むしろ分科会には大学研究図書館に対し病院図書室を一つの大きな要素として取り上げていたことから、この地区会の姿勢をうかがうことができた。また、このように活発に討論している人々が（大部分は女性だが）最低限度図書館学のマスター・ディグリーを持っており、小さな病院図書室もその例外ではないという事実を考え合せる時、いわゆるライブラリアンのレベル、層の厚さを日本との対比においてひしひしと痛感した。各地区ではこのような地区会を、春と秋の2回開催している。

米国内の医学図書館見学を通して感じたことを二、三述べてみたいが、私が訪問した図書館の大部分は通リーペンの見学しかしていないので、それらの図書館について多くを語る資格はないことをおことわりしておきたい。

これら医学図書館見学を通して全体として強く感じたことは、メドラインによる即時文献検索の活発な利用と普及ということである。これはひとえに、NLMの経済

米国医学図書館協会 Fellowship による研修を受けて(本田)

力・指導力と国内ネットワークのたまものである。近い将来わが国にも日本医学図書館協会の全国組織を中心にメドラインのネットワークが確立され活発に活動することを切望する。

米国西部を代表するUCLA生物医学図書館は、館長のLouise Darlingを中心に強力に活発な図書館・情報活動を続けている。図書館は朝から夜遅くまで利用者でにぎわっている。この図書館は米国内でもいち早くコンピューターを取り入れた図書館の一つで、例えば雑誌受入記録業務については、事務室にすえつけられたオンライン・ターミナルによって即時に処理しており、すでに完全にルーティン化されている。このシステムの詳細については、「丸善ライブラリーニュース No. 91, 1973」に裏田和夫氏が紹介されているので参照されたい。コンピューターは医学センターとの共用であるが、コンピューター専門官が図書館専任であることはうらやましい限りである。ここは、ハワイ・カリフォルニア・アリゾナ・ネバダの各州を包含した太平洋南西部地域の地区センターでもあり、地区センターとしての仕事、例えばメドラインサーチャーのトレーニング、地区内病院図書室およびライブラリアンの指導、地区内図書館職員対象の各種研究集会講習会の開催地区内相互貸借の一括処理等実に活発な活動を繰りひろげている。更にこのほかにNLMの助成金を受けてUCLAのBrain Research Instituteとの協力で、全世界のBrain Chemistry専門家を対象とした情報活動(Brain Information Service)をおこなっている。その主な活動は、図書館で受け入れたBrain chemistry関係の雑誌を専任のライブラリアンがスクリーニングし、速報として登録された研究者に流す文献情報を中心で、数種類のBulletinを定期的に発行している。これなど従来の図書館のワクを越え、ライブラリアンの職域を学術的・専門的に開拓し拡大させる仕事として、非常に参考となり、また同時に予算難・定員難

UCLA 医学図書館入口

UCLA 医学図書館閲覧室

ウェイン州立大学医学図書館外観

で四苦八苦している日本の医学図書館にとって医学図書館の質と内容を充実発展させる一つの方向として、まことに示唆に富んでいる。

米国中西部ケンタッキー・オハイオ・ミシガン州からなる地区センターは、ミシガン州デトロイト市のウェイン州立大学医学部シフマン医学図書館にあり、その推進者は Dr. Pings である。当時氏は同大学医学図書館長で、現在は同大学の University Librarian である。この地区は、ニューイングランド地区や太平洋西南部地区のような1つの大きな図書館をリゾースライブラリーとして地区センターとする集中化・中央化システムではなく、その地区内のいくつかの大学をリゾースライブラリーとする分散化方式を取っているが、各々の地区の特殊性や条件から考え出されたものであろう。ウェイン州立大学シフマン医学図書館は、医学図書館援助法による補助金とシフマンさんからの寄付金で新しい独立の医学図書館を1970年に竣工し、オープンした。

ここでは1965年から様々なテーマを「ウェイン州立大学医学図書館レポートシリーズ」という形で発表している。例えば、Report No. 20, “Establishing a medical library network for the Metropolitan Detroit area, by Mary E. McNamara, 1966” とか No. 56, “Survey of user services in 42 medical libraries in Metropolitan Detroit, by Sandra H. Pendell, 1970” というレポートがあり、われわれにも興味深いものがある。また、この図書館でも NLM の grant により、Hospital Library Mission を実施しており、これは、NLM が米国内に大学医学部図書館を中心に作ったネットワークの末端組織として、実際に臨床にたずさわっている病院医師に医学情報を供給するため、まず病院に図書室または類似の機関を作ることを奨励し、病院図書室を指導・育成し、それを地区の医学情報ネットワークに連結することによって多くの利点があることを理解させる仕事である。

医学図書館 20 巻 1 号 (73)

同館レファレンスデスクとレファレンスト・ウール

る。これがひいては米国内の医学レベルの向上につながり、また、広大な面積を持つ米国なればこそ余計に必要なネットワークなのである。一口で言えば、NLM が全国 11 地区に情報供給サービスを委託し、末端の病院・医師開業医等の要求を満たすためのシステムで、この一連のネットワーク作りの1つが Hospital Library Mission である。

この mission は訪問指導のほかに、病院図書室に働く非専門の図書館職員や助手を対象に、分類整理作業のごく入門の手ほどき、簡単な Reference tool の使い方、資料・情報の探し方など実務を中心とした小規模の講習会を可成り頻繁に開催している。この結果として、これら病院図書室から各種の質問が絶えず寄せられ、一日レファレンス・デスクを担当した私を驚かせた。こうしたことは、その地区のリゾースライブラリー（資料を豊富に持っている図書館）の当然の義務と考えているようだ。言いかえれば、それだけ community 意識が強いのである。こうした指導やサービスをする上で、自館や相手の機関が国公立とか私立であるといった感覚が全く見受けられず問題にしていないのは、日本とひどく異なっているように思われる。

現在の日本における全国医学情報ネットワークは、日本医学図書館協会を中心にしたもののしかなく、これとて実態は大学医学図書館を対象としたもので、全国に幾万とある病院やまして開業医を考慮に入れたものではない。協会の将来構想や全国ネットワークを検討する際、こうした点も考慮に入れる必要がある問題ではないかと考える。Hospital Library Mission は、非平に示唆に富んだ興味深い活動である。

以上、短かい滞米中の印象を簡単に報告したわけであるが、これら医学図書館の見学を通して得られた知見は、日本医学図書館協会の進むべき方向とか、自分の図書館の将来あるべき姿等を考えていく上に、非常に参考

NLM 正面入口

NLM: 内部: レファレンス・デスクとツール

ミシガン大学医学センター図書館入口附近

同館閲覧室 (窓に見えるのはリザーブック)

南加大学ノリス医学図書館全景

NIH 図書館: レファレンス・デスクと閲覧室

カルフォルニア大学サンディエゴ図書館

カルフォルニア大学サン・ディエゴ医学図書館

となる。また、米国の医学図書館で働くライブラリアンと共通の問題を語り合い、友好を深め、こうした友人を持つことは非常に有意義な心楽しいことである。自館だけにとじこもらず世界に仕事の輪を広げて行きたいものである。

資金の関係でこの NLM fellowship があと何年継続するかわからない状態でもあり、一人でも多くの方がこの fellowship を活用されることを強く希望する。

参 考 資 料

1. 津田良成：MEDLARS 探索サービスの導入と日本

医学図書館協会. 医学図書館, 19(1) : 1~12, 1972

2. 野添篤毅：AIM-TWX, MEDLINE—米国における MEDLARS 最近の動向. 医学図書館, 19(1) : 69~82, 1972
3. 裏田和夫：UCLA におけるオンライン・リアルタイムの雑誌記録管理. 丸善ライブラリーニュース, No. 91 : vi~vii, Mar.-Apr. 1973
4. Wayne State University School of Medicine, Library and Biomedical Information Service Center : Report series.

〈表紙紹介〉

久留米大学医学図書館

昭和3年、初代伊東校長は自ら和洋図書千数百冊を寄贈されて初めて書庫の形態を整われ、昭和5年には図書取り扱いの大綱が定まり各教室において既に購入していた図書の受入登録が行なわれ学生用参考書の備え付け閲覧心得が定められました。図書室は昭和7年1月に開室(本館一階、現第二病理)、利用者が逐次増加してきたので、昭和10年5月室の大改造が行なわれました。同年6月大洪水により、床上3尺までの浸水をみましたが、図書資料はいち早く2階応接間に運んだので一冊の被害も受けませんでした。洪水後は極力復興に努め同年9月より再開しました。昭和18年4月教授団の寄贈により35坪の木造閲覧室を建築し、昭和21年3月久留米医科大学図書館、次いで昭和25年3月久留米大学附属図書館となり、医学部分館及び商学部分館より構成されるに至りました。ところが昭和28年6月26日未曾有の大洪水が起こり全国にも数少ない貴重な文献や施設等を始め潰滅的打撃を受け閲覧利用できるものは皆無に等しくなったのですが教職員や同窓生の援助と各方面の協力によって逐次蔵書の増加をみたのであります。丁度その時、本学創立25周年記念事業の一環として医学部分館の建設が計画され、昭和28年12月工事に着手、翌29年6月

に落成しました。建物は鉄筋コンクリート造り3階建、建築面積600m²で1階は学生閲覧、2階は出納室、事務室、3階は教授閲覧室、館長室、複写室、書庫は258m²。ここに改めて図書館としての充実を備え威容を呈するに至ったわけであります。しかし、めざましい医学の進歩は文献量の増大を招き、ここ数年図書館の機能の進展はもはや望めない状態となり、改築を迫られて来ました。そうした中であって石橋理事長の好意により医学図書館が寄附せられ、昭和41年10月着工、昭和42年6月末に完成し7月1日に落成式が行なわれました。新図書館は建築延面積2,780m²で鉄筋コンクリート造り3階建、新図書館の建設に当っては、過去2回にわたる水害の苦い経験を考えて、2階、3階が図書館に当られ、1階は合同講義室、1年教室等、2階は閲覧室、事務室、館長室等、3階は特別閲覧室、医学資料展示室、視聴覚室等が配置されました。書庫は536m²で20万冊の収容能力をもち、しかも閲覧室は冷暖房設備が整っており、医学関係文献の増強とあいまって図書館機能は飛躍的に増大せられ研究、教育に寄与する事が期待せられ、本学の Study Center といえることが出来ます。

(昭和48年10月16日受付)